

なれども、田ぬしもせんすべなしといふめり、よりて里人等、この樹をおほの木と呼び傲したり、おほの木は大之樹なり、或は訛りて、王の木ともいふとぞ、この樹の高大約一十二三丈、幹の周圍は七尋にあまりつべし、そが根より凡二丈許あがりて、大枝三本にわかれたり、その二枝は周圍二尋に及ぶべく、又一枝は二尋半三尋にも近かるべし、これよりして梢まで枝毎に三叉にわかれて、絶えて増減あることなし、その葉は檜に似たれども、何の木といふことをまらす郷を三枝と唱ふることに、全くこの木に困りてなり、和名類聚抄國郡部下總國千葉郡の郷名に三枝あり、又加賀國江沼郡の郷名にも三枝あり、この兩郷は佐伊久佐と訓せたり、これらも亦木によりて、その郷に名づけしならん、彼のおほの木の處を森谷といふ、樹下に溝あり、これより東をクゲ反畝といふ、クゲの義未詳、反畝より上を、王の垣かゝと内といふ、方言に、凡稻田によるしき處、苗頃などすべき處を、かいとといふとぞ、こは辛未の夏月、飛驒高山の二の町なる、二木長右衛門來訪し、日の物語に及べるなり、○中略又老樹の枝のわかる、よしを詠みたる歌あり、そは左のよみ人、本書女なるべし、

古今六帖第六いづみなるまの田のもりの楠の千枝にわかれて物をこそ思へ

きのらう女

夫木抄九廿いづみなる信田の森の千枝ながら玉のうゑ木にかざる白雪

前大納言隆季卿

この信田なる楠は、その枝の繁きによりて、千枝にわかる、と詠みたるなるべし、彼の飛驒のおほの木は、その葉檜に類すといへば、枝のわかれしよしは似て、その物は非なるべし、

瑞木

〔延喜式二十一部一〕祥瑞

平露樹一名也、其形如蓋、生於庭、以候四方之正、右大瑞